

松本藩の6つの藩主家

松本藩は6つの家が代々支配し、城とその周辺に足跡を残してきた。中には短期間しか支配権を持たなかった家もあるが、支配期間の長短でその影響が決まるわけではない。

江戸時代（1603-1867）、徳川幕府が各領地を支配する大名を決めていた。この任命は自由に与えたり、取り消したりすることができた。忠実な大名には一般的に、より繁栄した領地や、江戸（現在の東京）の将軍の御殿に近い場所にある領地が与えられた。しかし、公の秩序を乱すような行為をした大名は、あまり好ましくない領地に移されたり、完全に領地を奪われたりすることもあった。松本は望ましい領地とされていた。松本城は軍事的に重要な位置にあり、その支配権を与えられた大名は、幕府と血縁関係にあることが多かった。

石川家（1590-1613）

石川数正（1593 年没）は、徳川幕府成立以前に松本を支配していた豊臣秀吉（1537-1598）によって松本藩主に任ぜられた。数正は大名として、本丸に重層の天守閣を建てることを優先させた。この計画は、失敗に終わった秀吉による朝鮮攻めの最中に数正が亡くなった後、息子の石川康長（1554-1643）に託された。1594 年、大天守、乾小天守、渡櫓の主要建築物が完成した。

小笠原家（1613-1617）

徳川幕府を開いた徳川家康（1543-1616）は、家康の長男の娘に嫁いだ大名小笠原秀政（1569-1615）に松本の支配を委ねた。秀政の松本入国は、ある意味で里帰りであった。石川家が入国する以前から、小笠原家はこの地を支配していたのである。秀政とその後継者である小笠原忠真（1596-1667）は、交通網を大幅に整備し、各村から庄屋を選ぶ制度を導入した。

戸田家（1617-1633）

小笠原家の転封後、松本には戸田康長（1562-1633）が任命された。康長は家康の異母妹と結婚しており、幕府に忠誠を誓った大名が戦略的な領主に任命されたことを示す実例である。戸田は、徹底した検地を行い、作物の収穫を詳細に記録していた。

松平家（1633-1638）

松本城主としての在任期間は短かったが、松平直政（1601-1666）は、現在の松本城を築き上げる上で大きな役割を担った。直政は、辰巳館や月見櫓を増築し、城の規模を拡大した。彼の、狭間や石落などの防御的な要素を排除するという決断は、江戸時代の平和と安定を象徴するものであった。この時代、既存の城の拡張は厳しく禁じられていたが、直政は将軍・徳川家康の孫であるため、特別な許可を得ていたであろう。

堀田家（1638-1642）

松本は、松平家の再大領化により堀田正盛（1609-1651）が支配することになった。この人事にもまた、婚姻政略が絡んでいる。正盛の義理の祖母は春日局（1579-1643）で、三代将軍徳川家光（1604-1651）の乳母として政治的に大きな影響力を持っていた。二の丸に米蔵を建てたのは正盛とされているが、正盛自身は松本に足を踏み入れたことはなかったと言われている。

堀田家（1642-1725）

水野忠清（1582-1647）とその子孫は、83 年間にわたり松本を治めたが、これは歴代の大名に比べると明らかに長期間の統治であった。1724 年には、新たな検地を行うとともに、藩の歴史と地理を記した『信府統記』を編纂した。しかし、水野忠恒（1701-1739）が江戸城内で他の大名の子息を刀で襲撃したことから、その支配は急速に終わりを告げた。

戸田家（1726-1869）

水野家が去り、幕府が松本藩を直轄していたが、戸田家が再任され、大名戸田光慈（1712-1732）がその任に就いた。光慈は弟の光雄（1716-1758）とともに、1728 年に藩内を巡察し、民衆の心をつかんだ。また、戸田家は 1793 年、後に開智学校となる「崇教館」を設立した。1868 年、明治維新による急激な政変で、1869 年に最後の大名となった戸田光久（1828-1892）が新政府に藩政を委ね、1871 年に松本藩は正式に廃藩となる。